

くまさんだより

日本基督教団 豊橋東田教会

〒440-0055 愛知県豊橋市前畑町 112 ☎0532-54-3435

公式サイト <https://azumada.org/> 武井恵一牧師 080-3428-3200

2020年

7月号

7月19日発行

イラストは全て池谷陽子さんご提供

7月5日 聖霊降臨節第六主日礼拝説教

「人を裁くな」武井 恵一牧師

ルカによる福音書6章37～42節 新約聖書113～114頁

ルカによる福音書6章37節～42節

³⁷「人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。人を罪人だと決めるな。そうすれば、あなたがたも罪人だと決められることがない。赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される。³⁸与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。押し入れ、揺すり入れ、あふれるほどに量をよくして、ふところに入れてもらえる。あなたがたは自分の量る秤で量り返されるからである。」³⁹イエスはまた、たとえを話された。「盲人が盲人の道案内をすることができようか。二人とも穴に落ち込みはしないか。⁴⁰弟子は師にまさるものではない。しかし、だれでも、十分に修行を積めば、その師のようになれる。⁴¹あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。⁴²自分の目にある丸太を見ないで、兄弟に向かって、『さあ、あなたの目にあるおが屑を取らせてください』と、どうして言えるだろうか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目にあるおが屑を取り除くことができる。」



主イエス・キリストは、ルカによる福音書6章20節からの平地の説教で、大勢の弟子と多くの民衆を前に、「貧しい人々は幸いである」と話し始められました。その言葉は、どこを切り取っても、私たちの心に深く訴える箇所です。それに続き、本日の説教箇所は、「人を裁くな」に始まり、「罪人だと決めるな、赦しなさい。」「与えなさい」「弟子は師にまさるものではない。しかし、修行によって師のようになれる」「兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目にある丸太に気づかないのか」と、次々に欠かすことのできない内容が語られてゆきます。



南国の花
ハイビスカス



本日の説教箇所の前に、「敵を愛しなさい」と主イエス・キリストは話されています。そして、「人を裁くな」につながります。その愛は、とても具体的な行為として勧められています。その愛を基とし、わたしたちを身近に導き、助けて下さる主イエス・キリストは、ここでも、「人を罪人だと決めるな。そうすれば、あなたがたも罪人だと決められることがない。」と告げられました。少しお断りしますが、人を裁くな、人を罪人と決めるな、ということは、その人の全人格を善人、悪人と決めつけて裁くな、という意味で、決して罪を曖昧にしようということではありません。

「裁く」ということを、今の時代の裁判と考えると、実際に訴えたら、手間とお金が必要です。法律的に実行する人は滅多にいないでしょう。よほど、腹に据えかねた方以外は本気で「人を裁く」ことはしないのではないのでしょうか。裁判に持ち込むより、暴力沙汰に向かう可能性もあります。勿論、正当な理由で裁判を行うこともあります。でも、本当を言えば、わたしたちはごく当たり前のこととして、いつも人を裁いています。非難し、文句を言い、相手の人に損害を与えようとします。実際はできないことが多いのですが、わたしたちは、自分の物差しで、人を計りますが、自分の物差しが正しいかどうかは、あまり省みられないことが多々あります。わたしたちの日常生活において、家族を、隣近所の人を裁いてあげつらい、時には、人を傷つけることさえ珍しいことではありません。

けれども、裁くことが、愛による時、それは、良いこと、とても良いことにつながります。それは、わたしたち自身の「あり方」次第です。わたしたちの周りには、こうなってほしいとか、こうした方がいいのではないかと、思わざるを得ない場合もあります。善意であれ、裁きたくなる人は、沢山います。言わないでいるよりも、言ってあげた方が、その方のためになるのでは、と自問自答します。そんな時、まず、主なるイエス・キリストに祈ることをお勧めします。

祈るうちに、わたしたちは、自分自身がキリ

ストの十字架によって罪を赦され、裁きの罰から贖われていることに気付かされます。キリストの愛によって新しい命を与えられ、生かされている恵みを思わざるをえなくなります。あれこれと他人の足りないところを「裁かなくてはいけない」という思いは、「愛する」ことへと変わります。「裁く」より実際にもっと良いやり方、それは、「愛する」ことです。

わたしたち自身が、人間として生きる生涯の途上で「裁かれる出来事の当事者＝被告人」として、立たされるときがあることを意識してください。わたしたち人間は、生涯のどこかで、自分の人生はこれではいけない、と思う時があるのではないのでしょうか。他人ではない、自分が自分自身を裁いてしまいます。

それは、現在の自分の在り方、生活、生き方をプラスに変えたい、と自覚しているからです。それは、生活全体に関わり、人生に大きくかわる現実です。そんな時、こんな自分ではいけない、と裁いてしまい、結果が思うようでない、と落胆することさえあります。わたしたちは、愛され、励まされる時に、一步を歩むことができるのではないのでしょうか。愛を持って支えて下さる方、主イエス・キリストがわたしと共にいて下さると思う時、わたしたちは、自己中心でありつつ、新しい命に生かされます。



キリストの愛は、裁きを愛へと変えてしまいます。人を罪人と決めつけることから解き放たれます。わたし自身が罪を赦されているのですから。与えるときも、惜しまず与える者とされます。そして、わたしたちが、惜しまず与える時、秤で測る場合、あふれるほどに盛りをよくし、与えられると主は語られます。主イエス・キリストからの、神様からの、驚くほど大きな愛がなければ人間存在そのものが歴史を歩んで来ることはできなかったと思います。

また、わたしたち自身に限らず、今日よりも明日は、少しでも良い日にと願うのは、ごく普通の人が当たり前前に考えていることです。現在の在り方をプラスに変えたい人は、裁きではなく、信頼できる支えを必要としています。無意識的かもしれませんが、助け手、支える愛を必要としています。そんな時、その方の近くにおいて、信頼できる助言者と私たちはなりえるでしょうか。

キリストを信じ、キリストにより頼む方は、だれでも、その人の近くにおいて、支えとなりえることを主は、厳しい言葉で、語られます。「盲人が盲人の道案内をどうしてできようか。しかし、あなた方は、師であるわたしの弟子です。弟子は主より優れたものにはなれないが、修行すれば師のようになれる」と諭されました。わたしたちは、自己中心の存在ですから、歩むべき道が見えず、失い、他の人を導くことはできません。修行というのは、訓練、トレーニングと理解することができます。

ここで、わたしたちは、「自分にはそんなだいそれたことができるのだろうか」と問わざるをえません。わたしたちは、自己中心の存在ですから、歩むべき道が見えず、見失い、他の人を導くことはできません。人を裁き、人を罪人と決めつけ、「あの人はだめだ」と言って、なかなか人を赦すことができない私たち自身の心の闇を知っているからです。ですが、主は、まず、自分の目の中にある丸太に気がつき、自分自身が自己中心の存在だと気がついた時、誰でも新しい歩みを始めることができると語られます。

ルカによる福音書6章42節

⁴²自分の目にある丸太を見ないで、兄弟に向かって、『さあ、あなたの目にあるおが屑を取らせてください』と、どうして言えるだろうか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目にあるおが屑を取り除くことができる。

わたしたちは、自分自身はさておき、あまり根拠もないのに、他人を非難し裁きます。気が付かずに、色眼鏡で、神様をないがしろにしていると、あれこれ言うことがあります。自己中心性は、大きければ大きいほどに、自分では認めることができないほどになります。それは、なかなか自覚できないのですが、それに比べて、他人の足りないところ、他人の欠点を見つけるのは容易なことです。

まずは、主に愛されている自分を見つめましょう。他人の欠点、非難すべきところを見つけるのではなく、主キリストに罪赦され愛されている自分を見つめるとき、自分自身の罪が顕わにされ、贖われていることを知らされます。わたしたちの目の中の丸太に、主イエス・キリストは、十字架をもって気付かせてくださいました。わたしたちの師は、主イエス・キリストです。師である主イエス・キリストを見上げるとき、かすかでも主の示される方に向かい歩む者とされています。

裁くのではなく、同じ痛みを持った人間として、自分をも、兄弟の欠けをも直してゆく者とされます。人を罪人だと決めつけるのではなく、罪を赦され、与える者としての道を、示されています。わたしたちは、人を裁き、人を罪人とするのではなく、赦す者として、また、与える者としての道を、恵みの内を歩ませさせていただいています。

祈り 讚美歌(21) 155番 「山辺にむかいて」

聖書の言葉はすべて以下から引用しています。

聖書 新共同訳：

(c) 共同訳聖書実行委員会

Executive Committee of The Common Bible Translation

(c) 日本聖書協会

Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988